慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奥井復太郎と近江哲男の鎌倉調査:都市社会調査の戦前と戦後
Sub Title	Two Kamakura surveys by Fukutaro Okui and Tetsuo Omi : a comparative study of urban social research between pre- and postwar Japan
Author	松尾, 浩一郎(Matsuo, Koichiro)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	2003
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.76, No.6 (2003. 6) ,p.41- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20030628-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「新たな発見」を得ようと試みている。

奥井復太郎と近江哲男の鎌倉調査

―都市社会調査の戦前と戦後―

松

尾

浩

郎

一 社会調査の展開と都市社会学の揺籃

問題の所在

近江哲男の鎌倉市調査奥井復太郎の鎌倉町調査

四三

Ŧi.

おわりに――発見の論理と方法のジレンマ

問題の所在

的問題をはじめとして、容易に解決し得ない課題がつぎつぎに提起されている。しかしそれでも、 社会調査の困難が叫ばれて久しい。多くの調査者が調査環境の悪化を感じている。また、 倫理的問題や認識論 社会調査をま

ったく行わずに社会の研究を進めることはむずかしい。今日も少なからぬ研究者たちが、社会調査を行うことで

41

ならば、

調査者は調査によって何をどのように見出し伝えているのか、

という問いである。

うに思われる。 より原初的では まずただちに想起されるのは、 難 にありつつも、 つまり、 あるがなおも問い続けなければならない問題が、 そもそも社会調査における「発見」とは何なのだろうか、 あえて社会調査に関 方法論や調査技術などの工夫であろう。 わろうとするとき、 社会調査という営為の根底に横たわっ 調査者は何をなす必要が しかしこうした技術面での論点とは別に、 という問 いである。 あるの だろう 換言する

る。 験していることであったり、 きを経て到達した発見だとしても、 見以前にそれについての体験者が必ずいるはずである。 験したことがないというようなものではない。〔中略〕社会調査が発見する『新しい事実』については、 治は次のように述べている。「社会調査が発見する新しい社会的事実は、 か、 このような構造は、大量人口からなる現代都市社会の調査によりいっそう明白に現れる。 わゆるその に知られ はない。 然現象ではなく社会現象を対象とした調査における「新しい事実」とその「発見」の特質につ しかし、 までの なりの数になることさえりうる。そうした事情を考えれば『新しい事実の発見』といっても社会調査 異質なるものに焦点をあわせるだけで、 ていない異質なるものを掘り起こし、「新しい事実の発見」 もちろん、都市社会の多様性に着目して、 社会調査、 『第一発見者』には決してなり得ないであろう」(大須、一九九○、三五七頁) とり h あるい け日本における都市社会調査の中心 (研究者の多くが都市住民だと仮定すれば)それは自らの隣人たちが日常的 は容易に無数の証言者を得られるような、 都市社会研究の課題がすべて尽くされるわけでは しかもその体験者の数は、 (研究者やマジョリティとされる人たちの生活世界 的 な動向を振り返ってみると、 を目指していくという志向 社会調査が発見する以前 ζĮ わば常識的なことであっても不 少数であるとは限らない ح 社会調査とい 標 にはだれ 性 Ę からみて) 化し もあり得 その う手 大須真 た量 に体 ₺ ば 発

的

調査を導入することでこうした問題を解消しようとしてきたという、

大きな潮流を見出すことができる。

何

をどのように語ってきたのか、

ある社会調査が、

どのような場所から、

どのような視角をもって、

何のために、

何をどう見てきたのか、

そして

筋のいうように、

今日われわれには、これまでの社会学や都市社会研究、そしてその認識をささえた武器で

あるいはどのように調査結果が利用されてきたのかを、自省的に跡付けてい

技法、 .調査にはデータ収集とデータ分析を分離させることに特徴があるが、 わけても推測統計学の技法を利用することで、 とするのではなく、 データの分析結果こそを「発見」と捉えるという思想が存在している。 生の事象の「再解釈」として「発見」 その基底には、 デー を位置づけなおす道 夕の収集をも 統計的 ?分析 って

を進んでいったのである。

す可能性はないだろうか、 いて、 統計学的論理 まれるのである。 れてしまい、 かし標準化調査におけるこうした発想には問題が残る。 標準化調査の分析がすべて悪いのではない。 標準的とされる方法論をそのまま受け入れて依拠することが、 調査対象・社会事象との対話でもあるデータ収集過程が、 (とりわけ統計的推論の論理) また、 データ分析は統計学の論理に即して進められることになるが、 という問題である。 があらゆる社会現象を読み解く万能の力を持つわけではない。 再考したいのは、 というのも、 調査における発見の場という重要な局 根底にある発見の論理への無関心をもたら 単なる準備作業となってしまう危険が 発見の場が、 よくいわれているように データ分析の場 窓に局 もちろ 面 限

しまう。 会理論』 考するために、 (中筋、 筋直哉は 社会学が整備されるほど都市調査は困難になる。これは社会学における都市調査の一つのジレンマであ 『調査法』 九九八、 「社会学の常識的な調査法をただ流用することによっては、 中筋は「社会学の常識的な調査法が整備される前に著わされた都市社会学の古典に遡って、 一八頁)と述べている。 の結び合わせ方」(中筋、 そして、こうしたジレンマ状況にある今日の都市社会調査法を再 同所) を検証しようと試みている。 都市はかえってとらえられなくなって

43

会調査の、

作業が 求 められ ているように思われ る。 それはつまり、 調査過程の根底にある論理に自覚的になることで、

わ n 本論文は、 われ が直面している「社会調査の困難」 以上のような認識に基づいて、 太平洋戦争をはさんで戦前と戦後に奇しくも鎌倉という同 を乗り越えようとする試みの一環に他ならない。 じ地 域社

な都市社会学者の調査経験を事例として取り上げ、いまだ今日のようなかたちに制度化されていなかった都 会の調査を行った、 奥井復太郎(一八九七-一九六五)と近江哲男(一九二二-一九八三)というふたりの 光駆:

戦前から戦後へとつらなる展開の一端を再検討しようと試みるものである。

事例として、 都 市社会学の展開を確認し、 議論は以下のような構成で進めていく。 奥井復太郎が一九三〇年代末に行った「鎌倉町調査」を検討する (第三節)。さらにもうひとつの 社会調査史研究として本論文がとる視点を明らかにする まず、問題状況の全体像を把握するために、 日本における社会調 (第二節)。 つぎに第一の 查

ح

社会調 査 一の展開、 と都市社会学の揺 営為のもつ意味、

論理、

問題性などについて、若干の考察を加える

(第五節)。

ふたりの都市社会学者が「発見」したふたつの鎌倉像を比較しつつ、

一九五〇年代中期の

「鎌倉市調査」

す

調査という を検討

(第四節)。そして最後に、

近江哲男が東京市政調査会の一員として取り組んだ、

日本に おける社会調 查 一の状況

問題や社会的矛盾の発生は、 として捉えるにせよ、 社会調査 一の起源ない その し本質を、 源流 多くの人をして社会調査に駆り立てることになった。 は明治期にまで遡ることになる。 近代社会の自己認識として捉えるにせよ、異質なるものを発見するための手段 たとえば近代化 都 市化の進展にともなう都市

意し

ていた時

期でもあった。

的

応型の調査」 になると、 期 1 になり、 Ш 合隆男 の社会調査 理 年の 自覚的な社会調査が試みられるようになりはじめ、 (一九九六) へと変容していく。 仮説と観察・調査との相互循環回路に閉塞化が見られるようになる、 ・社会観察活動は |展開期」、一九三二―一九四五年の は近代日本における社会調査の歩みを、 しかし戦時下の 「問題発見型、 仮説・理論構築型、 「制限期」 「制限期」 になると自発的な自由な調査活動 「理論・仮説検証型、 に区分して、 一八六八一一九 政策構築型」と特徴づけられる。 次のように整理してい 兀 とい 政策策定• 年 Ò ぅ 萌 が 芽期」、 検 制 証 限されるよう 型 る |展開期| 九 問題対 萌 Ŧi. 芽

学的 たない限り民俗慣行の採集調査か、 圧迫され、 |調査しか許されなかった状態」 か 限 しこのような時 期 が著わした調査論は、 現実を矛盾としてとらえる実証的研究の余地はせばめられ、 における調査活動の困難につい 期にあっても、 日本の社会学におけるまとまった方法論議の嚆矢といえるものである。 (島崎、 日本の帝国主義的侵略のもとにあったアジア諸民族の 社会調査の画 一九七九、 ては、 島崎稔も 期をなす新しい試みもなされていた。 一六-一七頁)であったと述べてい 「天皇制国家主義のもとで社会科学的 わずかに、 戦争の遂行にさしさわ る。 『客観的』 たとえば、 研研 究 な社会人類 戸 の 自 田 りをも 貞三 戸 由 $^{\prime}$ $_{\rm H}$ は

だけでなく、 会学の調査研究の方向を暗示するものであった。 は科学としての社会学の一 九三〇年代 東京圏 は 「制限期」 を舞台にして幅広い調査活動を実施していたが、 でありながらも、 部門をなすものとして社会調査を位置づけた議論を進めているが、 戦後から今日へと続くその後の社会調査の展開につらなる基 また、 たとえば本論文でとりあげる奥井復太郎は、 それらはみな一 九三〇年代の仕 それは戦後日 鎌倉 事であ 本

社会的な拘束からの解放、 的 な変化 が生じるのは終戦後である。 そして何より眼前で生じつつある社会的矛盾や激しい社会変動は、 それ までとは 変して、 社会調 査が 盛 んに行 ゎ れるようになる。 社会調査による

現状の認識と分析を促した。

づけることができる。

男が東京市政調査会の一員として実施した調査活動は、

このような時期の都市総合調査の代表的事例として位置

調査とその方法論が、まさに日本の社会調査界を覆い尽くしはじめた時期であった。 は 団の援助のもとに組織化したSSM調査、そして、日本都市学会などが中心となって推進した都市総合調査 査を志向する趨勢も見逃せない。日本人文科学会や九学会連合による学際的調査、 サーベイ調 終戦後しばらくたつと、 みな一九五〇年代に本格化しはじめたものである。 ・統計調査の方法論が広く学習され活用されるようになった。さらに、(4) G H Qの民間情報教育局(CIE)などを介して導入されたアメリカ式 一九五〇年代はアメリカ型の標準化された大規模な社会 尾高邦雄がロックフェラー 大規模な共同調 本論文でとりあげる近江 の洗練さ 査や総合調 など n た 哲 財

多様な立場が競合しつつ社会調査論が論議されていく、 的根拠が必ずしも調和したものでないことが一〇年の過程のうちに次第に明らかになってきていた」 でのアメリカ社会学の流入が戦後の調査の盛行を招来した大きな原因であった。 価しつつも、「多くの社会学者のあいだに生まれつつある安易な調査」を非難した。「一方での現実の要請 況を振り返り、 する動きも既に現れはじめてもいた。 査が てい ている。 社会調査の転換期をなしたという点で、 く時期であった。 転 機」 注4で指摘したテキストの刊行状況に象徴されるように、 「戦前からみれば、 を迎えていると警鐘を鳴らしたのである しかしその一方で、 社会学の研究方向における社会調査の飛躍的な一 島崎(一九七九、初出は一九五六)はいち早く戦後十年を経た社会調 近江の調査の舞台となった一九五〇年代は、 戦後の社会調査ブームと量的調査への傾斜を批判的 新たな局面を迎えたのである。 (島崎、 九七九、 サーベイによる量的調査の方法論 七頁)。 しかし、 単なるブー 般化」が見られたことを評 きわめて大きな意味を持 この現実的 ムの段階を脱し に再考しようと とし、 根拠と理論 が確立さ 査 他方 一の状

向を示唆する内容を持つものであった。

先述したように、

九五〇年代には社会調

査

の方法論

の洗練化と転換が進んでい

た。

社会調査

に比比

、ると、

都市社会学と都市社会調査

橋勇悦 格的 ラフ研究 的な役割を果たした「第二世代」を代表する鈴木広、 斂させはじめたのは、 九・倉沢 えば一九 って、 とがあるが(倉沢、一九九二・ほか)、曰く、戦前あるいは戦後間もない時点から活躍をしていた奥井・磯 ほぼ等しく指摘しているように、日本都市社会学が自らのアイデンティティを明確にし、 った大家が自ら学史を論じているのに注目される。 日 な発展は、 鈴木栄太郎という三人の 本の都市社会学史はこれまで様々な機会に論じられてきた。 より若い世代である「第三世代」に引き継がれつつある、 (二九九三) 五九年に発表した論文で、 一九五九)。 地域集団 鈴木広・奥田・倉沢らを中心とする「第二世代」 の通史をはじめ、 レベルでの都市研究、 学界の画期をなした彼らの五九年論文はそれぞれ、 一九六○年頃であったといえるだろう。 「第一世代」がそれぞれの方法で都市の社会学的研究を試みたが、 学界に本格的なデビュ 鈴木広 (一九八五)、奥田道大 (一九八七)、倉沢進 (一九九二) ら斯学を担 パ 1 ソナリティ・レベルでの都市研究という、 その他にもかなりの数の学史研究があるが、 奥田、 ーを果たしている(鈴木広、 倉沢の三人は、 たとえば、 という。 の手によってもっぱら推し進められ、 戦前から近年までの多様な潮流に目を配 大規模サーベイ調査による都市 世代論の視角から学史が整理されるこ そして、 いずれも一九六〇年頃 都市社会学界の制 一九五九・ 研究の方向性を定め収 その後の学界の 学問 それらの多く 奥 具体的 度化 としての 田 近年に 研 モ に中心 ラグ に 村 九五 英

調査を繰り返すことで、 市社会学は五-十年ほど遅れて、 都市社会学の形成が促されていったという関係を、ここに見て取ることも可能であろう。 研究領域としての自立・確立を迎えたといえる。 新しい方法論を活用して社会

は、 とも多い。一方、 として、近江は「第一・五世代」(注5参照)として、それぞれ学界の制度化以前の研究者として捉えられるこ 冒頭でも述べたように、制度化以前の都市社会調査の再検討という目的で奥井と近江の調査を取り上げるわけだ つある時点、 ずれも日本都市社会学の成立、 このような学史上の展開に、 社会調査と都市社会学それぞれの制度化過程の歩みに、微妙なズレが生じた瞬間を背景としているのである。 戦前の奥井調査の場合はそれ以前、という相違がある。一九五○年代を舞台とした近江の社会調査 社会調査をめぐる状況としては、戦後の近江調査の場合はアメリカ型方法論をまさに受容しつ 奥井と近江による鎌倉調査とそれに伴う都市郊外研究を位置づけてみると、 あるいはその制度化よりも以前であることが指摘できる。奥井は 「第一世代」

社会調査史研究の視点

が、

両者を比較対照するにあたっては、

奥井と近江の調査のあいだに横たわっている、

社会調査における戦前と

戦後の断層(あるいは連続性)に注目して考察を進めていく必要があろう。

土壌から何を継承したのか、 個 々の調査の内実を明らかにすることを第一の課題としたいが、それだけなく、当該の調査活動は、 調 査 の検討に進む前に、 そして後にどう継承されていったのかも、 社会調査史研究としての視点について一言付言しておきたい。 検討していくことが必要だと考える。 まずは事例とする どのような

て試みられたのか。 どのようなものであったのか。(c)その調査はどんな調査主体が、どのような対象に、 ように問題を定義して、どのような調査課題・目的を設定したのか。(b)そのための理論的 |査史研究が問 どのように評価されて、 わなければならない課題として、 (d) どのような調査資料が得られて、 調査活動や政策・事業・運動形成にどのような影響を与えていったのか。(f)そ 川合(一九八九)は以下の諸点を提示している。 どのように分析が加えられて報告書になった どんな調査方法を用 仮説や概念装置 (a) どの

という、

先駆的な郊外生活者の一人でもあった。

査をとりまく歴史的社会的背景はどのようなものであったのか。 者はその後どのようなかかわり、 であったのか。 査状況や調査の進行状況はどのようなものであったのか。(h) の調査に参加した人々 i 被調査者の「声」はその調査にどのように出されているのか。 (調査者) はどのような人々であったのか。 関連、還元をもつことになるのか。(k) 調査の対象となった被調査者はどのような人 g その調 他の同様の調査との関連や、 査 一の組織 (j) その調査結果と被調 形成、 資金、 当時 その 0) 調 調 々 查

査 お ここでは以上のような課題を念頭に置きつつ、①背景 おまかに整理して、 の実施 か ら発表まで ふたつの鎌倉調査を検討していくことにする。 \widehat{c} ď f g h iなど)、④その後 â þ の展開 kなど)、 \widehat{e} ②準備段階 j kなど)、 \widehat{b} という四つの位 f gなど)、 相 3 調 に

奥井復太郎 の鎌倉町調査

\equiv

背

四〇年に出版した主著『現代大都市論』 卒業後、ただちに経済学部の助手となった。 上野)で生まれたが、主として典型的な山の手地区である本郷で育っている。一九二○年に慶應義塾の理 東大震災前というきわめて早い時期から神奈川県三 研究を命じられたことを契機として、 奥井復太郎は日本における都市社会学の創始者として知られる。 彼の長い都市研究がはじまった。 は、 当時の学部長堀江帰一より 都市研究を志す者はすべからく紐解く名著として名高い。 浦郡の葉山に移り住み、 一八九七年に東京市下谷区車坂 「都市経済論」および 鎌倉町調査などの成果を集大成し一九 生涯そこから東京に通勤しつづけた 「社会改良計 (現台東区 また、 財科を 関

的に把握し記述するための装置として参考とする程度にとどめていた。 や研究プログラムとして受容するのではなく、 とえば、一九二○年代に登場したシカゴ学派の人間生態学にはいち早く関心を寄せていたものの、 九・二〇〇一)。それはつまり、 しての東京体験と生活史のなかでのその変遷が、調査研究の視角にも方法にも色濃く現れている ŧ 無視し得ない 奥井 の研究の土壌をなしたものとしては、 が、まず第一に彼自身の都市体験に注目すべきである。 先行研究という背景をあまり持たずに調査研究を試みたということでもある。 イギリス社会思想やドイツ社会政策学や中世都市論 ソローキンらの都市―農村社会学などと並んで、 奥井がはじめて調査方法論を論じたとき、 奥井の都市研究には、 自らの一生活者と 地域社会を実証 などの. (松尾、一九九 都市社会理論 知 菂

業社会学者は、 妻のミドルタウン調査も参照し得た可能性もあったはずであるが、 九三三)の社会調査論にも、少なくとも著述の中では言及していない。 査の業績に目を配ろうとはしていない。 鎌倉町調査の時点では、 いまだ日本には現れていなかった。そのような事情もあってか、奥井は日本における他の都市 都市社会調査に自覚的に取り組んだ「社会学者」、つまりアカデミズムの一員たる 奥井が調査活動に乗り出すのとほぼ時を同じくして発表された戸田 この時点では言及はない(6) 海外に目を向ければ、 たとえばリンド夫 調

ている(奥井、一九三五、

五頁)。

、ンダーソンとリンデマンの所説に触れつつも、結局は

「筆者自身の経験に於いて」調査すべき項目群を選定し

巻 究の傍証資料を獲得するための作業として社会調査を位置づけていた。 業地帯調査など、 わせて調 一の各地 奥井はまず自身の大都市理論を構築することに主たる関心を持っていたものと思われる。 を対象に 動の対象も広がっている。 都市圏の中心から周縁へと調査活動の手を伸ばしていった。 連の調 査を試みてい 奥井の調査活動経験は鎌倉町調査だけではなく、 た。 丸の内ビルディング街の 調査にはじまり、 そのために、 このような中で鎌倉町調査に取 大都市論 三田学生街 彼は基本的 九三三年頃 0 議論 調 0) に理 展 から東京 京浜工 に あ

近

一来流行的になつてゐる近隣団体の組織化について、

最も重要な基礎」

になると強調している

(奥井、

九三九

組 ような経緯・背景から鎌倉町は奥井にとって最後の本格的な社会調査の場として選ばれることになった。そして たのである。 とであった。 んだ大きな目 ちょうど鎌倉は旧 ζý わば、 的 は 「外辺地域に於ける土地の生活を吟味する事によつて」大都市の広 奥井の大都市論の仕上げとして、 来の観光地・別荘地から郊外住宅地へとの急激な変容のただなかにあった。 東京から四十キロメートルの距離にある鎌倉町に注目し がりを明ら にするこ この

準備段階

そこは、

彼の生活の本拠である葉山のごく近傍でもあった。

既存資料の集計程度にとどまるものが多かった。 や(一九三五、六年)、改めて都市社会調査法を論じた機会にサーベイ調査の必要性を認識するなどの過程 かという疑問 が繰り返されていた。 本格的なサーベイ調査を試みるに至る。 (奥井、一九三六a)、鎌倉町調査ではじめて調査単位を地域住民個々人(ただし調査票は世帯単位であった) 調査方法の範例を十分に見出し得ない一種の孤立状態にあって、 .が投げかけられることもあったという。 さまざまな調査を繰り返す奥井に対して、 しかしその中でも、 たしかに、 鎌倉町調査以前の奥井の諸調査 同僚教授や学生から、 勤務校における学生アンケート 連の調査経験のなかで方法論 それが果たして学問 は 上 調 入手可 の試行錯誤 査 とした を経 0) 経 能 な 7 な 0

京との は東京生活圏 内 調査報告論文では直接明示されてはいないが、 の住 関係を知る、 民 の特徴を地区別に分析する、 の飛び地へと変貌する過程にある」 ②東京化した鎌倉と昔の鎌倉との関係 という三つの調査課題が設定された。 この調査を導いた理論仮説は、 というものであった。 (新旧の生活態度の相違と相互の摩擦) この仮説を検証するために、 とくに第三の 明らかに 「鎌倉とい 課 を知 題 につい ① 鎌 る う地域 ③ 鎌 ては、 倉と東 社会

a、五頁)。

課題群を設定したことである。 み出した瞬間でもあった。 鎌倉町調査が従来までの奥井の調査活動と根本的に異なっていたのは、 マクロな視点を持つ第一の課題から、 それはまた、 単なる実態調査から社会学研究のための調査 比較的ミクロな視点である第二第三の課題まで ひとつの調査に、 へと、 多元的な構造をも 新たな一歩を踏 つ

法の導入以前にあっては、 うのも、 ったといえる。 けでも膨大な労力が求められる。 井の調査を実際に支えてきたのは、ゼミナールの学生や、奥井の指導する学生団体である 進展であるというよりも、 造化・分析が不可欠となる。 「大東京研究会」のメンバーたちであった。現在のようにコンピュータを利用できない状況では、 ーリスティックに、 調 サーベイ調査の範例も国勢調査にしか求め得なかった。(?) 査の企画や準備は、 焦点の錯綜なく把握し論じるためには、 当時 の鎌倉町の約六千世帯三万人を悉く対象とする全数調査を計画したからである。 しかしそれでも、 かつ分析的に把握することを欲する方向へと変化していった帰結であるといえるだろう。 それまでの諸調査と同じように、 奥井の研究そのものが、 記述的な統計技法のみという制約のなかで工夫して分析を試みなければならなかった サーベイ調査という手法での調査が計画されたのは、 奥井の一連の調査は、 鎌倉の調査はグループの能力を超えかねない一段と大規模なものとなる。 個人 (ないし世帯) 対象となる複雑きわまりない地域生活の社会的現実を、 数多くの学生たちを組織化することではじめて可能にな 基本的に奥井個人が独力で進めていった。こうした奥 を単位としたデータの大量収集とその編集 調査技術上の変化であるとか 「都市問題研究会」 サンプリング調査 単 なる集計 より

まで得ることで、遂に一九三七年二月から三月にかけて鎌倉町調査が実施される。 倉町役場の援助 多方面からの協力を得ることで鎌倉町調査の企画は実現に向けて動き出した。 (具体的な援助内容は不明であるが調査事務局は町役場内に設置された)、 日本学術振興会からの 学生はもとより家族の協 補 助 ガ 鎌 調査状況を窺い得る資料は数少ないが、

調査の実施から発表まで

そして留置き法を用いたこと程度に過ぎず、ごく基本的な情報のみにとどまっている。 体」(奥井、 直接分析には生かされることはなかったため、 「それ丈け従来の調査より幾分の充実を期し得た事は欣ばしい」と自己評価している(奥井、一九三九a、 「著者の関係した諸種の調査」 納税関係のデータとはまた別に、「戸口調査以外の資料蒐集を志した」(同所)という。 役場の統計を併用することで正確な分析が可能になると考えたのである。こうした予備調査を試みた結果、 ,口調査の具体的な過程・方法に関しては奥井はほとんど説明していない。実査は「土地の青年団其の他 . 口調査に先立って、 調査手続きに関係する事項のうち明らかにされていることは、 一九四〇、 四六四頁)に協力を仰いだというが、それ以上の詳細は不明であるし、 まず町役場の協力を得て各種租税公課に関する資料を収集し、 の経験上、 さまざまな調査項目のなかでも「富度」 具体的にいかなるデータが集められ利用されたのかは不明である。 調査項目、 は正確な測定が困 回収数とおおよその回収率、 その分析を行っている。(8) しかしこうした資料は、 調査票も公表され 難であるの 四頁)。 0)

項は世帯主以外の家族・使用人・同居人すべてについてもそれぞれ調査する方式なので、 前の居住地・電話の有無・収入年額・世帯主氏名、②個入事項 となってい 査項目は、 の地位・従業場所・副業内職・出身学校、という合計十五項目である(奥井、 たはずである。 世帯事項と個人事項とに大別されており、 調査票は自記式で回答する形式であった。 ①世帯事項 ――姓名・続柄・男女・年齢・本籍地・ 現住所・鎌倉在住年 一九三九a、 調査票はかなりの分量 限 三頁)。 鎌 倉町 職業及び 個人事 在住以

調査 を持ってい に関する記述を見ることができる(鎌倉町、 . る。 この記事には、 調査事務局が役場内に設置されていること、 九三七、 八四頁)。 当欄は 町役場からの公的 「町役場援助のもとに愈々その な広報とい う性

当地の月刊郷土雑誌『鎌倉』

の

「鎌倉町だより」

という欄に、

奥井

0

に着手」したことなどが記されている。また、「この程左記の挨拶状に添へ、『鎌倉町戸 、に配布されました」と実査の様子や挨拶状の文面を紹介している。(資料1)、(10) 'n [調査調査票] 用紙を各

【資料1】 鎌 倉 町 だ ょ 1)

年齢 校 収入金額・電話の有無・鎌倉町在住の年限・鎌倉町在住以前の居住地・家族使用人同居人名とその主人との続柄 査に着手されましたが、この程左記の挨拶状に添へ、「鎌倉町戸口調査票」用紙を各戸に配布されました。 ・小学校等別)等を記入すべく仲々詳細を極めたものです。 應義塾大学都市社会学教室主任教授奥井復太郎氏は鎌倉町 一本籍地・職業及職業上の地位・副業 (職業名) の有無・従業の場所・出身学校 (大学・専門学校・中等学 の社会調査のため、 町役場 緩助 のもとに愈々その 同票には

鎌倉町戸口調査票記入についてのお願ひ

進行と共に恐らく在住の皆様に色々と御面倒をおかけする事となりませうが、 調査の目的としては鎌倉がどういふ土地で、どんな人々が住みどんな生活を営んでゐるかを学術上から研究いたし 今回日本学術振興会の後援を得て慶應義塾大学都市社会学教室に於いて鎌倉町の社会調査を行ふ事となりました。 のであります。 そのために鎌倉町役場からも多大の御援助を与へられました事は深く喜んでおります。 何分御協力をお願ひいたし度く存じ 調査の

調査者としても甚だ愉快に存じます。 様の前に示す事が出来ると思ひます。 御協力の程を重ねてお願ひ致します。 皆様の手による町の発展なり改善なりに 此の調査の結果が役立つ事となれば

私共の目的は純然たる学術的のもので、

今回

の調査が幸ひ成功すれば鎌倉とはかういふ土地であると云ふ事を皆

昭和十二年二月

慶應義塾大学都市社会学教室 主任教授 務所 奥 鎌 井 倉町役場内 太 郎

調

見や社会学研究のためだけに行うものとしてではなく、 の強調など、 なる利益 本資料のなかでもとりわけ興味深いのは 意味を持ちうるかという、 その後いわば定石となる項目も含まれているが、それだけではなく、 調査結果の還元の問題についても触れている。 「挨拶状」であろう。 より広く活用すべきものとして捉えていたようだが 調査主体や後援者の紹介、 この調査が対象者にとっ 奥井は社会調査を単 学術 目的であること に発 (後

端がこの文言にも表れている。

能性に注意を促している。(ユ) ر د ۲ 持つ方面に於い 漏 率にすると当時 て不成績とは云へない れが如何なる方面 調査票を回収した結果、 現在の感覚からは極めて高率の回収率といえるが、 てゞない事を望む」(奥井、一九三九a、 の鎌倉町の人口・世帯の約八五%程度に相当する にあつたかは遽かに断定する事は出来ない。 かも知れないが、 有効回答として数えられたのは五二三四世帯(二万五六二三人)分にも上った。 割六分強の調査漏れは、 四頁)と述べ、 奥井は「一個人の資格で行つた調査の成績としては 嘥 (母集団についての厳密な議論は 願ふ所は調査の目的に向つて著しき関係を 何となく不安を思はせるものがある。 分析結果に何らかの誤差が生じてい なされ . る可 П 決 収 0)

ては、 主で質的データが従であることを持論としていたように(奥井、一九三六a、六五-六頁)、集計・分析にあたっ った。 収集された藁半紙製の調査票個票のデータは改めてカードに転記され、 まず徹底してすべてを数え上げることに重点が置かれている。 学生から家族までをも動員する人海戦術で、少しずつ分担して集計作業を進めたという。 そのカードを利用して集計 客観的デー 分析を行

人口 にはそのような特徴が見出せない。 タ分析では、 まず手始めに世帯と人口の構造を概観している。二十歳前後の女性が特異に多い一(エシ こうした人口上の特性は、 鎌倉が営業使用人(主として男性) は少なく 方で男性

の多い「純粋消費地」であることの表れであると奥井は推測する。

家事使用人(主として女性)

取ってい

その多くが百年数百年の在住期間であったという。 る在住五十年以上 ょうど古い時代の鎌倉と現代鎌倉の画期に相当すると考えた区分法である。 ல் 在住 年限は、 一の世帯 五十年を第一の基準にして区分している。 が二四・六%、 逆に五年未満の新来世帯が三一%であった。 土地土着層と流入層に二極分化している様相をここから読 五十年前といえば明治二〇年頃 結果としては、 五十年 ・以上世帯とい 永住世帯とみなされ だ相当し、

無 あった)、 可能であったものの、「総世帯中、 南 いか」(奥井、一九三九a、二九頁)と奥井は述べている。 部 来住世帯の前住 こうした世帯に集中していることを明らかにしている。 がの山 東京などからの来住世帯と勤人世帯が強い関連を持っており、 の手地区であった。 地は、 五四・六%が東京府、 さらに、 約二割から三割までの世帯が、 職業を「勤人」と「業主」に大きく分類した場合(その比率は 四〇・八%が神奈川県であり、そのうちかなりの割合が データの構造や集計能力の制約上、 東京・横浜に対して通勤的関係に在るのでは さらに、東京や横浜への通勤 完全な計算は不 ほ 東京 ぼ 通学者 同等で 西

京 • 結論づけてい 在住年限・前住地・職業・業種・通勤通学先に着目した以上の分析をもって、 横浜の近郊化しつゝある」(奥井、一九三九a、三七頁)と、第一の調査課題 現在の鎌倉が (鎌倉と東京との関係) 極端 に云へ につ ば東 <u>-</u>

既述のさまざまな項目を改めて集計しなおすことからアプローチしている。 きる新旧 注 会地図に描き出していることに象徴されるように、町内各地区ごとの個性を詳細に記述することにもっぱら力 が n てい の課題 住民層のコントラストについては、 (新旧の生活態度) ここでの集計は おお と第三の課題 む ね記述的なものにとどまっては ある程度の分析的な視点が向けられてもいる。 (地区別分析) には、鎌倉町内の一三の大字、 1/2 るが、 永住世帯比率、 字ごとの個性として窺うことので 一二三の小字ごとに、 たとえば、 新来者世帯比 新住 率を社 民は

消化不良とも思える不充分さが垣間見えることは否めない。

る分析作業の根幹をなしているといえる。

全体的に見れば、

想像を絶する膨大な集計や、

執拗ともいえるまでのエラボレーシ

ョンが、

奥井

の調

お

け

|査項目を独立変数に従属変数に縦横に振り分けながら、

すべてを「数え上げる」ことで、

お

よそ六十にのぼる表、

七つの図、

二つの地図を作成している。

各種調·

繰り返す勤人サラリーマン層とその他の層の間には、「依然一脈の隔線」 ₺ 『者などの非サラリーマン的職業にしか就けないこと、そして、小規模な世帯を構え通勤という間断なき流 発達の余地のない変容方向であるために、 つ らサラリーマン層であり郊外住宅地化という鎌倉の変容を担っているが、 旧住民の変化は限定されており、 が引かれ 離農したとしても植木造園職 それは当然あるべき商業や 「生活様式及び理想の上 や労 の 動 相 業 を

違」(奥井、一九三九b、八三頁)

があると分析している。

実際の分析には加味されることなく終わっている。 けていたのか、 らず、データに根拠づけられた意味ある結論を導くことには失敗しているように思われる。 東京に通っている人」「最近まで東京に居住していた人」の検出を試みるという、 あるが、 らに第二の課題については、 生態学的な記述は実現させている。しかし、各地区の比較や、 第 の課題に対するアプローチは、 分析に活用できてい 結局集計すらされ 第三の課題に対しては、一二三の小字を単位とする非常に煩雑な分析作業をすることで、 あるいは都市的なコミュニケーション行動の指標として位置づけていたのか、 てい ない調査項目もある。 調査項目の設計の段階ですでに、 ないようである。また、 各世帯の構成員の属性と通勤通学関係を標識として、「東京的な人」 電話の有無という項目は、 膨大な労力を要する全数調査であったためか、 収入金額についても、 調査課題と質問内容の充分な関連づけができてお 傾向の要約などのためのアイディアは乏しい。 予備調査までしては 階層を判断する資産とし 単純明快な論理で貫かれて いずれ ζį 少なくとも るも かは不明 そ位 日 の z で 々

鎌倉という地

域社会を「発見」しようとしていたのである。

その後の展問

会論 めて濃厚になるが、 ることに注目される。 議は学生新聞 は明らかに主として鎌倉を念頭に置いており、郊外を大都市の一部分を構成する飛び地として捉え、 むしろ郊外にこそ、 鎌 倉町 の一つが、 「被調査者の所感を、 調 量的調査の方法と課題についての反省的な再考察も試みられている(奥井、一九三八b)。この方法論 **・査の経験は奥井の都市論と調査論の深化を確実に促した。日本の都市社会学界にとって最初** 質問が に掲載された小文であるが、 鎌倉町調査の経験のなかから生み出され、 鎌倉町調査で見出された 「強制的な性質を帯び」てしまう恐れがあること、「調査方法の是非」を検討するに 新中間階級に代表される近代的意識を身に付けた都会人が集まる、と主張するものであっ さらに付言するならば、 もつと聴」く必要があることなどを、「二三の調査を行つた経験者として」述べ 質問紙調査であっても「被調査者と調査者の関係」 「都市的」な郊外生活者たちの像が、 戦後の奥井の都市研究は市民社会論あるいは近代化論の色彩 理論化されていった(奥井、一九三八a)。 その拠り所のひとつになって に調査結果は左 中心部より 彼の郊外論 の郊外社 あ 7 だ が 極

体も、 六b)、 と専門書(奥井、 査にたずさわる以前の段階ですでに調査結果を還元する「義務」を主張していたにもかかわらず かしその一方で、 調 鎌倉町調査の結果が地域に還元され生かされた形跡は見出すことはできない。 査の結果が一般紙に紹介されたことを除けば、 一九四○)に限られていた。今日の鎌倉を訪れても奥井調査の痕跡を見出すことは難しい。 奥井個人の枠を越えていくような展開は、 大学関係誌 非常に貧弱なものにとどまってい (奥井、一九三九a・一九三九b・一九三九c) 調査結果が報告され る。 鎌 倉 た媒 石の調 九三

るものと思われる。

弁

の鎌倉町

調査とそれに伴う郊外論が提起した問題が継承されていく潮流をあえて見出そうとするならば、

てい 研究を先取りした内容や視座を持っていたにもかかわらず、 こととあいまって、 も少なかった。 また、 奥井は生涯 たのは、 鎌倉町 調査票個票とカードを保存していたという。(⑴) 奥井自身だったのかもしれない。字ごとに丁寧に分類して紙紐で束ねられていたというカ その後の研究に充分に継承されなかったことは、 調査とそれに立脚した奥井の郊外論は、 鎌倉町調査がいまだ未完のプロジェクトなのではないかという印象を我々に抱かせ 戦後の都市社会研究の主要な潮流 鎌倉町調査が未完のままであることを最も強 戦後のそれらの議論の中で言及され検討されること 奥井による分析が消化不良気味に終わっていた のひとつとなった郊外] F る

近江哲男の鎌倉市調査

四

再分析され新たな調査によって再検討される機会を待ち続けていたのではないだろうか。

背

景

傾向 お 含したもっと大きな大きな地域的共同生活体を考えたい。どちらに帰属するかと問うこと自体、 東京の職場へ通勤する鎌倉の住民は鎌倉の集落社会すなわち鎌倉の生活協同体に帰属すると認むべきであ せている。「生活の本拠はやはりその住居にあると見るべきいろいろの理由が存するから、 (鈴木栄、 いては意味が薄いように思われ がい 木栄太郎は郊外住宅地を大都市の一部をなす飛び地とする奥井の見解に かに進んでも人の集落社会への帰属の関係はその住居を第一義的に見るべきものであると思ってい 九五四、 一五頁)という。 る この批判に疑義を呈したのが近江哲男である。 (近江、 一九五五a、 一五六頁)と鈴木に反論している。 (名指しではないものの) 近江は 私は都 「住居と職場とを包 大都市の生活に 市 の近 批 代化 判 を寄 0

ていることにも象徴的である。

るが、 近江 を位置づける視点にも共通するところがあった。 の仕 連の調査研究がまず挙げられるだろう。 奥井と近江のそれは他に類例を見ない先駆的な存在であったし、 とりわけ 彼が東京市政調査会 (以下市政調査会と略記) 郊外論は一九六〇年代以降になると都市社会学の主要テー 何より近江の調査が奥井の先行する調査のフィー の研究員として一九五二ー 大都市圏という広がりの中に郊外住 五 七年に ルドを継 取 マとな り組

に 関連に注目しながら確認しておくことにしたい。 近江の業績として位置づけられることは少なかった。そこでまずは近江の調査の背景をとくに市政調査会と(⑸) かし近江の調査活動は市政調査会の共同研究の一環として実施され、 報告書は同会の名義で発表され たため

補となり、五二年以降は母校の文学部専任講師に転ずる五七年まで、 しかし臨時徴兵令により海軍に召集されたため学業を中断し(武山海兵団で回天特攻隊員となるが九死に一生を得 復員後改めて早稲田大学文学部で社会学を学んでいる。一九四九年に卒業後ただちに市政調査会の研究員(エタ) 九二二年に生まれ秋田を故郷とする近江は、 戦中期に早稲田大学で学生生活を送りフランス文学を専攻した。 同会の研究員として活躍する。

査活動にたずさわる中で彼の調査研究スタイルが固められていったことは想像に難くない。 ―五六年の鎌倉市調査 、市振興調査と明石市市政調査に参加し、一九五二年の豊中市総合調査と、ここでの検討の対象となる一九五四 近江の都市への関心がどのようにして形成されたのかは明らかではないが、民間研究機関において実践 (一九三九年に市制施行)では、 主導的な役割を果たすに至っている (磯村、 研究員補 一九五五、 の時代に 的 な調 瀬

いう。 当時 の市政 どちらかといえば理論的研究を重んじる風潮があり、 調 査会の研究室は行政学者を中心として構成されており、 社会調査に主体的積極的に関与しようとする 社会学は傍流というべき存在であったと 頁。

捉えても間違い 第 報告書 部をなしている社会学的調査は、 は 研究員は少なかったという。 機会が、 ただ一人の社会学者であった。 章 「鎌倉市民とその生活」と第二章 (市政調査会、 豊中や鎌倉での社会調査であったという。 ない と思われる。 九五三) 市政調査会の研究活動を主に担った第一研究室のなかで、 の第 彼の孤軍奮闘によって実施されたという。具体的にいうならば、 当時の市政調査会において社会学者としての本領を遺憾なく発揮できる数少な 部 「鎌倉市および鎌倉市政にたいする市民の意見」 「豊中市の実態」や、 豊中や鎌倉の共同研究を主導しただけでなく、 鎌倉市調査の報告書 (市政調査会、 鎌倉調査の時点では近江 は 近江個-豊中市調査の それらの 人の仕事と 九 五七) の

どの整備 う名称を冠した」(近江、 新たな試みを必要とする要因にもなった。 企 さらに委託者の主たる関心はむしろ行財政の調査に向けられ も奥井と同じように手探りで調査を進めていくことになる。 |画された調査であったわけではない。 鎌倉市調査をはじめとして市政調査会での一連の調査は、 が進められ始めてはいたが、 一九五四、 五〇頁) 都市調査、 しかしそれは逆に、 たとえば豊中市の調査は結果的に日本で「はじめて都市総合調査と 調査になった。 なかんずく総合的調査は範例となる試みが少なく、 すでに社会調査の世界は推測統計学的技法 どれもみな調査対象市当局からの委託調査であった。 従来の学界の定石をなぞるだけにはとどまらない、 てもいた。 近江個人や社会学界の研究動向を受けて 近江 の導入な の場合 41

準備 段階

豊中調査は一

ここでは豊中調査を中心に、 先行する市政調査会での一 鎌倉調査へと至る展開を検討する。 連の調査活動の経験 は そのまま鎌倉市調査のための準備の過程にもなってい

九五一年一〇月に豊中市からの委嘱を受け、主として一九五二年の約一年間が調査期間に充てら 61

ものであり、

さらに各般の都市総合計画樹立の資料とするため、 市当局が示した目的は 「都市計画の再検討、 下水道基本調査、 都市総合調査を行う」(市政調査会、 地域決定の再検討等が進行中 一九五三、 序文) の本市として、 という

主として当時の懸案事項であった市域拡張問題が念頭に置かれていたようである。

考察されねばならない」(同所)というものであった。高度に実践的な目的を委託元から示されてはい 「主査」として主導した。(18) 柱のひとつに据えている。 えて行政学的関心を超えて社会学的な視点に引き寄せた市民生活実態調査を、 らゆる問題が所属する大都市圏の視野において、すなわち、 に立って各般の行政を検討する」というものであり、また、「豊中市のようないわゆる衛星都市の場合に のような委託を受けて立案した調査方針は、「まず豊中市の社会・経済的実態を明らかにし、 近江はこの調査のなかで、 世論調査の実査・集計を担当したほか、 母市および大都市圏内各地域との相関関係に 調査全体の基礎になるものとして この実態調査編を その認識 たが、 の あ Ŀ て あ

豊中市調査をめぐるさまざまな経験のなかでも、 (一)方法論と調査技術、 =共同研究体制、 後の鎌倉における調査活動にとくに関係すると思わ \equiv 委託調査の課題、 四 仮説構成の問題、 n ること 0 应

を挙げることができるだろう。

実態調 自身の構想に従ってこの調査を行」(近江、一九五四、 調査の方式について、 る参与観察が理想だと考えていたものの、「費用その他の関係で実現できなかった」という。結局 ンプリングには地区・児童の就学の有無・世帯主の職業という三点から層化した上での まず方法論と調査技術上の工夫であるが、 査の手法にも窺い見ることができる。 わが国および欧米の文献の中にモデルとすべき先例を発見できなかったので、 本来は「リンド夫妻がミドル・タウンで行ったような」 全市約二万世帯のうち約千世帯から回収を得ることを目 五七頁)うことになった。こうした工夫の一端は 「階級別無作為抽出見本 都市 長期 わ 市 'n の総合 に わ n た

収率という「予想以上の好成績」をおさめた。 であり、 正確に定めているわけではなかった。 のいる世帯の場合は割り当て法で、就学児童のいない世帯はスノーボール法での配票であった。また、 リングから回 なる方法を用 少なからぬ問題が残った。 .収までの一連の作業を実際に担ったのは各地の小学校の教員であった。この方式は九六%以上の 17 配 票 回収は (就学児童のい 実態としては各小学校で条件に合う世帯を任意に選択したに過ぎないも しかし実際は無作為抽出と呼べるような方法ではなく、 ない世帯も含めて) 小学校の学童を通じて行ってい る。 就学児童 母集団も П

存し」(近江、 に共同研究の緊密を欠いた」(市政調査会、一九五三、序文)。「執筆者に都市行政に関する基本的な見解の相 しながらも基本的には皆がそれぞれ調査全体に関与する体制をとっていたようである。 また、 共同研究であることの問題点にも直面している。 九五四、 五二頁)ていたと反省している。 豊中調査は市政調査会の六名の研究員が少しずつ分担 しかし 一調査担当者 0

調 であるが、 61 れている。 査会の創立以来の建て前となっているが、これはむずかしいことである」(近江、 とくに大きな問題となったのは、委託調査であるために調査目的や調査課題が条件づけられていることであろ 般なるものは成立しない」「一定の調査目的ない 調査を総括する場において近江は、「われわれの実態調査は、 後に都市総合調査の方法論を論じた機会において、「そもそも、 調査目的と調査課題の重要性も逆説的に痛感するようになったものと思われる。 九五五b、 〔中略〕ここにわれわれの悩みがあった」「学問と実践の架橋、 われわれの体験では、それを欠くかまたはそれのはっきりしない調査依頼に接することが屢 三七頁)とも述べている。 豊中調 査 し課題があって始めて調査が可能であることは、 の経験の の中 から、 都市経営に役立つという実践的使命を負 調査目的、 調 あるいは学俗接近ということが、 査方法論や技術を学習していくだけ 調査課題を欠いた都市 一九五四、 五七頁) と述 自 総合調 市政 0 7

めとする数々の郊外研究

(衛星都市研究)

を手がけるが、

その端緒を豊中調査に見出すことができる。

豊中

市

体的 説 くための糸口をつかむ。 は大阪市を母市とする郊外住宅地であるため、 ように鎌倉は中上流階級を中心とした特殊な地域ではない。 視点はこうである。 に把握することはできない。 豊中がそうであったように鎌倉も大都市圏の 鎌倉市調査の仮説も、 近江はこのような構図を調査を通じて確認し、 まさにこの過程をつうじて精製されていった。 行政的範域にとらわれている限り本質的には社会状況を正 鎌倉市住民は第一義的にはより大きな東京都市 部を構成している。 彼自身の郊外論を展開させ L か 近江の基本的 し奥井 が 描 しく総 な仮 7 0 た 41

住民であり、 :調査という場で自らの手で引き継がれていくことになる。 近江は豊中調査が 大都市圏の中で何らかの構造にしたがって住宅を求め流動してきた一 「将来の踏み台」 (近江、 九五四、 五七頁) になればと念じていたが、 般市民である、 それはほどなく

倉

調査の実施から発表まで

較的長 政学) 市議会を通過した五三年度補正予算のなかで 倉市 の二人の研究員が、 い調査期間を費やしている。 調査は 九六九、 九五三年十二月に市当局より委託を受けたことに端を発する。 三六一頁)。 それぞれの専門分野を活かして分担し調査研究を進める体制になった。 市政調査会側は翌五四年二月より実地調査を開始し、 豊中調査とは研究チームは大幅に替わり、 「市政調査委託費」を三〇万円新規計上している (37) 基本的には近江と大田さとし 鎌倉市側は同年一一月二七 五六年三月までという比 (鎌倉市議会史編 日に

委託元から示された目的は、

①赤字に悩む市財政の再検討と、

②鎌倉市の都市構成

13

わば都

市

の性格を明

をは宅

査という色彩も濃い。

П

九万一

四五四人)

らかにすること、 る郊外住宅地論に引き寄せることで、調査課題を再構成していく。 は明確な目的や調査問題が示されたわけではない。 という二点であった。 財政調査はさておき、近江が担当する後者の しかし近江は豊中調査から引き継いだ個人的な研究課題であ 「都市 ·構成」 調査

7

かりであった六大都市SSM調査の影響を受けているようである。 数としても集計・分析時に活用されることになる。こうした階層への視点は一九五三年に報告書が発表されたば をおいているのも特徴である。 どの調査)という三つの要素に焦点をあわせることからアプローチしようと試みている。 巻 面から階層を捉えようとしている。これらの階層要因は、 [の調査)、 大都市圏の中に鎌倉市民の生活を位置づけて捉えるための調査戦略としては、生産活動 消費活動 (生活物資購買地や日常生活圏の調査)、人口移動 職業、 経済、学歴、文化、市内就業者と市外通勤者、 独立変数としても従属変数としても、 (転入転出状況、 新旧住民といった様々な側 出生地と前住地、 また、 (産業人口 さらには媒介変 社会階層に重点 来住 や通勤 時 期 通 な

活圏調査のアイディアも奥井の大都市論の枠組みを土台にしている。 見られなかった調査項目も少なくないが、骨格をなすのは奥井から引き継いだ調査問題であり、 東京横浜との関連を通勤と移住を軸に把握しようとする点は奥井の鎌倉町調査の手法を踏襲している。 地域住民組織や市政意識など奥井調 奥井調査 日常生 0) 再

たため、 三千世帯に、 人口だけを見たとしても、 奥井の調査時である一九三七年に比べて、鎌倉は 調査対象地域は新市域も含むことで大きく広がっている。 人口は約七割増の五万人になっている。 が今次の調査の母集団となった。 近江が質問紙調査を実施した一九五四年六月末の段階では、 (戦災を蒙らなかったとはいえ) 少なからぬ変貌を遂げていた。 さらに周辺町村 新市域も合算して、 (腰越町、 大船町、 計二万一九四二世帯 世帯数は二倍強の約 深沢村) との合併もあっ 万

類

が

用

ζį

られ

出 踏襲しているが、 市 している。 .役所の食糧配給関係の世帯票綴りをもとにして、一七分の一抽出によって一二五○世帯をサ サンプリ ングには豊中調査時の反省も活かし層化をしない無作為抽出法が利用された。 配票と回収は市内六中学校の教員が生徒を通じて行っている。 生徒の配布不能なケースには市役所職員が直接配票することで万全を期している。 学校を通している点では豊中調 その単位は世 ンプル 有効回 として選 一帯である。 査

は七三・二%であった。 調査票は「鎌倉市民生活実態調査」 と題した二頁のものと、「鎌倉市政世論調査」と題した一 頁のもの Ō 種

「居住地 住宅を購入した時期。 「家について」。 扇風機 「実態調 曆」。 査 冷蔵庫、 4 は八つの大問 現住所、 「家庭用 電話の所有の有無と蔵書数など。 ②「来住について」。 世帯主の出生地、 品 .から構成されており、 蔵書、 新聞、 住宅の所有関係、 雑誌などについ 現住所に住むようになった時期、 調査項目は以下に示すようにかなりの量に ⑤「買い物について」。 てし。 家の敷地の坪数と所有関係、 ラジオ、 蓄音機、 菓子、 前住地、 魚、肉、 ミシン、 現住 住宅を新築した時 本、 電気洗濯 のぼ 所 野菜、 に来 つ Ź た理 日 41 用雑貨、 ઢ 电 る。 ろ

3

1

文具、 鎌倉市 勤務先、 世論 衣料品 調 のあるべき将来像、 査 職業と地 や靴 は 鎌 位 を主にどこで買うか。 倉 通勤通学先、 0 住 一み心地、 などを質問するものである。 各種 通勤時間。 市民団体の評 市内・藤沢・横浜・東京別。 7 一最近 価 週間にした市外への外出につい 町 内会の必要性の有無、 6 「家族について」。 市政への興味、 · こ。 年 齢 8 性別 市政への 学歴、

単位の調査票の限界が明らかになってもいる。 区分してい 事実や行 ることに注目される。 動 レベ ル 0) 調査項目と、 l かし逆に結果として、 意識レ ベ なかには居住地暦のように ル の 調査項目を、 個 々人の行動や意識を正 二つの異なる調査票を用意することで明 「配票調査の項目としては不適当であ 確に把握できないという世帯 確 か

というのも、

Ó

分

たため、 記入状況 が悪く、 集計不能」 な項目、 しもあっ た (市政調査会、 九五七、 三九四頁。 以下本項での 引 は

て同書)。

な た 数えてい 通 宅地にあっては、全有業者の四割までが東京に通勤している」(三二-三頁)という。 横浜市一七・八%であった(三一頁)。「ことに、 「向は変わっていない。このような結果から、「鎌倉市は京浜大都市圏の中心部なかんずく東京と切っても 勤 └帯主に限ると三九%対六一%であり(一○頁)、 い関係にあることは明白である」(三二頁)と、奥井が示した構図を再確認している。 分析結果を概観してみたい。 |通学を除く市外への外出行動 し人口移動の面では戦前とまったく異なる状況を見出している。 た (四八頁)。 奥井調 査 また、 の頃より関東地方以外からの来住者が増加しているものの、 来住者層の前住地は東京が四六・三%、 まず東京大都市圏との関係についてであるが、 (主として買い物と訪問) 鎌倉のもっとも代表的な地域である鎌倉駅近辺および海岸 通勤先でみると、 のなかで、 鎌倉市内三七・五%、 東京を目的地とするも 横浜を含む神奈川県が三一・ 市内就業者と市外通 東京 日常生活圏調査でみても、 「鎌倉市 が 圧倒 東京都三二・ 0) 的 市民 は に多い 五. 勤 の約半 四%であ 者 の割合は 五 といい う 住

7 L 在必ずしも通用しないことを暗示している。 戦後に来住した人々であり、 いる²⁴ てい かし、 流入してくる移動経路が少なからず見出せたことも、 る鎌倉人は三割にみたない」(六五頁) また、 これほど大量にかつ急速に住民が入れ替ると、 大都市中心部から郊外へという一般的な人口移動経路だけでなく、 戦時中からの来住者を合わせると実に人口の七○%強にも達する。 もちろん、 のである。 地域社会の伝統や雰囲気は残存して新入者に働きかける。 奥井の時代とは異なる新たな状況だと指摘してい この結果について、「鎌倉人についての往時 伝統も変貌せざるを得ないであろう」(七○頁) 地方から直接郊外である鎌倉 戦前 の か 観念が でら住 る み **図**

図 1 近江の人口移動図式

に芦屋

マダム』

ح

いう言葉が

?ある。

この言葉からは、

裕福で派手な生活、

お上品さ、

虚栄心、

といったようなも

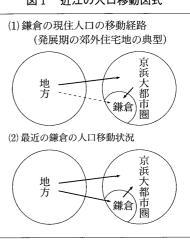
鎌倉に住むのは暮し向きの相当にゆたかな人たちだと 家計費を指標として経済階層構造をこう分析する。

現在でも一般にそう思われ

てい

る。

『鎌倉夫人



出所:東京市政調査会(1957: 68 頁) まず ンといっても、 に従事している」ことから、 近江は社会階層に焦点をあわせて以下のように分析を進 みられていた。 定する。 「従来、

7

の町といえ」ると規定する

(八頁)。

しかしサラリ

1

7

戦前の豊かな郊外型新中産階級のイメージを否

実態 深 実は火の 0 17 が連想される。 !調査から鎌倉にあまたの平凡な勤人を「発見」 0) は、 車 同じ鎌倉に住 という程ではないが、 だが、 む市民もまた、 調査の結果は、 とにかく、 隣人達の暮し向きを思い違いしていたことである」(九頁) と。 (※) 常識に反して、 京浜大都市圏内の都市地域として中位の暮し向きであろう。 するのである。 鎌倉市民が決してブルジョアでないことを示した。 近江 内 は 味

得調査 ぼ同 進 て信頼度 が とは 高 時 に 期 いえこの「発見」 ことによって、 ょ の高い分析がなされているが、 に実施された市民所得調査は、 n ば 鎌倉市の市民所得は、 には難しい問題も含まれているように思われ 部の高額の自由所得・ そこでの結論と近江の「発見」には大きな矛盾があるのである。 鎌倉市税務課が管理する市民課税台帳を主たる資料としており、 その圧倒的な部分を給与所得に負うており 配当所得などとともに、 る。 本市の市民所得総額を大きくすること 市政調査会の共同 (中略) 研究の一 般に そ 環としてほ の所 市民所 きわ 得水 め

それ

では新

ľ

ζJ

鎌倉はどのような住民で構成され

7

L J

か

は

職業に注目

「鎌倉市民の有業者の半分強は知

的

職

業

め る

基本的には

「鎌倉はやはりサラリ

まりに遠方まで拡散させた」(七五頁)

ことなのだと考察している。

とも見逃すことはできない。 (二五五頁) してい という。 る。 かくて本市市民の平均所得水準は、 さらにこれだけでなく、 近江の実態調査にはデータ分析時の技術的な問題点が若干あるこ これを全国平均に比べてみると、 か なり高くなって

対し、 層に特徴付けられるという結果を得ていた。「全体の四分の一近くが高専以上の学歴を有」し、(タス) は何であったのかは、 冊以上を「普通インテリ」とした場合、「関西の文化都市」豊中市では、それぞれ一八%、 水準をはるかに抜いている」(一七頁)。「鎌倉市民の学歴を、 (中略) 鎌倉ではそれぞれ二八%、三一%と大きく上回っている(二三頁)。近江が強調した「鎌倉の平凡さ」と 鎌倉の方がだいぶ高いことがわかる」(一八頁)という。蔵書数二○一冊以上を「高度インテリ」、五 学歴や文化面から調査された階層像は、やはり家計費による調査の結果に反して、 再考が必要であろう。 西の鎌倉と称せられる豊中市のそれと比較しても 一九%であったのに 鎌倉が高学歴 それは ・高階

てこのような状況を招来した原因は、 不適のように思われる」(三八頁)。 点を大いに補う魅力ではある。 感想を聞く。 のように述べる。 層の関係で居住不適の人達が、鎌倉には相当数住んでいるものと認められる」(三八頁)というのである。 ン等の面で生活条件のよくない低収入勤労者にとっては、 これまで摘記してきたような分析を総括して、近江は住宅地としての鎌倉に否定的な評価を下す。 清浄な空気、 「『電車には疲れるけれど、 閑静な環境、 しかし、 つまり、「現在は、 人口移動経路 慢性疲労気味の一般サラリーマン、ことに住宅・栄養 美しい自然、文化的な雰囲気、これらは確かに通勤時間 駅に着いて鎌倉の空気を吸うと生きかえった思いがする。 の変化などを根拠に、 東京の住宅事情のために、 通勤に一時間三〇分以上もかかる場所は住宅地として 「戦争の災禍により、 通勤時間 と職業および経 東京は人口をあ レクリ の長い鎌倉の欠 報告書は次 ≧ という Í 1

ら実現はしていない

その後 の展

市販 が、 地域社会の統計的な記録を残していくことを目的として、 ₺ 調 ·経済階層の実態報告は同市の議員を驚かせた」(近江、一九五八、一七頁) という。 青木元二議員などによって市議会内で提唱されたこともある。 用の報告書 対 象地へ の還元という問題に注目してみると、 (市政調査会、一九五七) (鎌倉市議会史編纂委員会、一九六九、八五一頁)。 の刊行に先立って、逐次鎌倉市側に報告書が提出されてい 奥井の例とは異なり、 定期的に同様の調査を継続していくべきだという主張 l かし市当局が応じなかったため、 ある程度の動きが確認できる。 その後一九六三年頃 る。 なか まず、

都市圏における人口移動経路に着目した近江のアイディアが、一九八○年代の浦野正樹(一九八七)による多摩 近江の調査は 言葉でいえば 象がまさに到来しつつある状況を見出したといえる。鎌倉の戦前と戦後の間には、近江(一九五七、三一頁) ひとつの定石を固めたとも評価できるだろう。 た知見は、 さらに富裕な層からなる飛び地的な郊外化とは異なる、 では、 郊外論 タウン (衛星都市研究) 学界におよぼしたインパクトという点ではどうか。近江の鎌倉市調査は、 近江 調 九六〇年代に百花繚乱する郊外研究の礎石のひとつとなったといえるであろう。また、 「望まれた郊外住宅地」と「余儀ない郊外生活」との深い断層があった、 「断層」のこちら側の状況を充分に把握し分析するまでには至らなかったかもしれないが、こうし 査 にも活かされているように、 の鎌倉市調査がひとつの区切りをつけ、 から少しずつ距離をとるようになり、今日彼を代表する業績と見なされている地 奥井が示しつつも充分に展開されないままであった未完の大都市 郊外住宅地を広域の中に位置づけつつ調査研究するアプロ 一般サラリーマンらが主役の大衆郊外化ともいうべき現 「完結」させたのである。 奥井がとらえた新中産 鎌倉市調査 という「発見」である。 一の後、 たとえば大 近 域 江 噟 集団 チの、 は 級

である。

研究などに力点を移していく。 「第二世代」 の研究者たちに引き継がれてい 郊外研究というテーマは、 間近に迫っていた日本都市社会学の転回を担うことに

五 おわりに―――発見の論理と方法のジレンマ

地域としての鎌倉、という地域社会像を提示したのである。 四三頁)。これらの発言にも現れているように、 撃退すべき必要を見ないのみならず、 移つて来たのでは無いか」(奥井、一九三九a、二〇頁)。「大都市の近郊化の現象に新旧勢力が必然に積極 ふものとすれば、 奥井は次のように分析した。「新しく鎌倉に来た者は東京の山の手又は西南郊外に住むと同じ気持ちで鎌 まず奥井と近江がそれぞれの調査を経て描き出したふたつの鎌倉像 鎌倉の場合は必ずしも之れに妥当するものでない。 鎌倉自身の性質が、むしろ之れを歓迎したからである」 東京山の手から脱出した富裕な「新中間階級」 つまり大都市の郊外的蚕食に対して之れを (郊外住宅地像) を比較してみた (奥井、一九三九b) の鎌 倉 特殊

頁)。「郊外住宅地に住む通勤者は、 された、 検討され えば同床異夢の状態にある」(近江、一九五七、三二-三頁)。「郊外住宅地としての鎌倉の適性が、 はり一つの大きな不幸である」、「市外通勤者と市内就業者という二種の住民層が同一地域に居住して、 方近江はこう論じた。「鎌倉人についての往時の観念が現在必ずしも通用 必ずしも充分でない生活に悩む平凡な人々からなる普通の地域として、鎌倉の地域社会像を提示したの ねばならない」 (市政調査会、 わが国の場合、 一九五七)。このように、「富裕な鎌倉」という常識的なイメ おおむね共同体としての地域社会を喪失してい Ü ない」(近江、 一九五六、 改めてここに る。 ジに覆 これ 極端 は ゆ

介在していると考えたい。

いえる結果が生じた理由を説明し尽くしてしまうのは、

単純に過ぎるとも思われる。ここではあえて他の要因も

したことは確かである。 社会が大きく変容したことである。市制が施行され、 などの条件も戦前戦後では大同小異である。 の結果を比較すると、東京との関係をはじめとして、 まず考えなければならないことは、 ふたつの鎌倉像は鋭く対立する。こうした相違は何故生まれたのだろうか。 したがってふたつの調査結果に大きな相違があるのも不思議ではない。 近江自身が主張しているように、 時間的経過による社会的現実の変容という要因だけで、正反対とも 両者で符合する点も少なくない。 市域も拡大し、 戦争をはさんで都市化・郊外化の質 両調査のあいだの十数年間 また、 たとえば通勤 とはい に現

うに思われる。 は 存在する。 題の整理にあたって大きな影響を及ぼすであろう。 も大きい。 に拘束されないようにするための工夫や調査技術 の構築であり、 つぎに考えられるのは二人の思考や視座にある先有傾向である。 激しい社会変動の渦の中での伝統的共同体の喪失であったように思われる。(3) 実際、 先有傾向も無視し得ない重要な背景のひとつになっていることは否めないだろう。 奥井が鎌倉あるいは郊外住宅地に見出そうとしたものは、新中産階級による都市型コミュニティ また市民社会の未来であったように思われる 何を見るための調査だったのかという面に注目すると、奥井と近江には大きな違い (統計的検定や尺度構成や対照群との比較など) 社会調査には「見たいもの」を見てしまう傾向がどうしても (松尾、一九九九)。一方近江が見出そうとしたもの すでにある理論的関心は、 彼らの調査には 仮説形 が乏しかったの 「見たい 成や調 があったよ 査問

連づけられているか、

あるいはその

「発見」

は調査データに充分に根拠づけられているか、

という問題である。

とどのように関

論理構造として単純であるからこそ明晰なものであ

たとえば東京との結びつきを見出す過程は、

かしもうひとつ、

より重視したい要因がある。

それは、

彼らの議論が調査における「発見」

72

地

域

· え両

査

時間

でも変容

觽

を評価

する際には恣意的にならざるを得ず、

先述したように近江調査は

そ

の基準を用意する工夫ない

し調査技法を欠い

てい

た。

そ

のために

鎌

倉という

「人と人との関係 鎌倉が東京的勢力をどのように受容しつつあるのかという論点については、 京的なるものを発見しようとする奥井の調査問題には充分に答えることができていたといえるだろう。 つ 勢力のコントラストについてはある程度は明らかにしているものの、 査と議 鎌倉と東京という 論には、 (人々と人々との関係)」は、 とくに大きな問題はないと思われるし、 「場所と場所との関係」、 まったく調査では捉えることができていなかった。 あるいは鎌倉人と鎌倉という「人と場所との 原始的な調査方法であったとはい 両者のあいだの直接的な関係 調査データは 何も語ってい え 関 鎌倉 係 の中に立 な ただし、 に 新 東 7

近江 包する概念を導入した分析であるとか、 リアしていた 鎌倉という場所 会的世界にまで広がっていこうとする。 しようとする試みがそれである。 については、 同床異夢」にあるという近江の表現は、 はある意味で「人と人との関係」 近江の場合も、 般化する視点を含んだ枠組みを持っていたのである。たとえば社会階層のように脱空間的で普遍化志向 の射程は、 近江も特に問題なくデータに着実に基づいた議論を展開していたといえるだろう。 「場所と場所との関係」についてみると、 奥井のように空間的に完結した枠組み /鎌倉というコミュニティ 奥井と同じように「人と人との関係」 近江の議論は、 に到達し得なかった調査の核心をついている。一方、「人と場所との 豊中市などとの比較を念頭に置きつつ鎌倉の相対的な位置につい L 両住民層の具体的な関係性に触れることを回避した表現でもあり、 か ――を位置づけていくためには、 Ļ 調査結果の数字の意味を評価 調査データが直接構成しうる空間に止まらず、 (鎌倉と東京の二者関係) 近江の場合は再び少々あやしくなってくる。 は調査で直接捉えることはできてい 何らか に限定されない、 開 の尺度なり基準が かれた空間 な より開 に記調 しかし奥井は 他 といい 新 直対 不可欠であ に も開 かれ IH . う 関 て を内 た社 民 か 係 価 n ク そ が

せっかくの意欲的な視座が逆に議論の疎漏をもたらすことにつ

なが

ったのでは

ない

かと思

われ

か しだからとい って、 ただちに奥井のほうが優れた調査研究であったという結論が導かれるわけでは

調査 普遍的な大都市社会の中に位置づけていこうとする近江の調査問題は、 げていくことで基本的には対処し得るものであり、 述することに重点が置かれた奥井のプリミティブな調査問題は、 可能であったといえる。 蕳 題 調 査 の射 程との関連についても考慮する必要もあるだろう。 他方、 人々をさまざまな次元から階層化し、 調査技術の限界点にまで達することなくおおよそ解くことが 調査対象地という閉じた空間の中で調べ数え上 鎌倉というひとつの地域社会の枠を超える たとえば、 結果として調査技術の限界点を超えさせ まず鎌倉という地域 社会を記

江 いうことである。 が取り組んだ調査問題が意欲的な内容のものであったとはいえ、 ここで改めて考えておきたいことは、 それなのに技術的な限界点を超えてしまったというのはなぜだろうか。 つまり近江に利用可能な調査技術は戦前の奥井に比べて飛躍的に向上していたはずである。 近江調査の一九五〇年代は社会調査法が急速に発展した時期であっ それが極端に複雑な問題であったとは思えな たと 近

てしまったように思われる。

止 を比較するだけではなく、 とに特徴 調査していない部分をも知ろうとすること、 いことは まらないものであったからである。 市 る領域にまで踏み出すものであった。 社会調査 がある。 「母集団と場所」 (あるいは社会調査一般)の問題性として提起したい点がここに存在する。まず第 しかし実際に近江調査が依拠した論理は、 母集団以上のものや別次元同士のものをも分析するという統計学的論理 との関係にかかわる問題である。 そしてより重要なことであるが、 というのも、 データを一定の形式に整序することで他と比較しうるようにするこ 近江の調査問題は調査の母集団である鎌倉とい 近江が志向したような統計的な標準化 サンプルから母集団を推測 母集団という 場所」 し対比可能なデー と他の の枠組っ 調査は、 一に指 場所」 う場 摘 み 夕同 か 直 l ح 接 た に

流

れやす

洗練によって逆に顕在化した一種の落とし穴である。 うもなかっ 論 を比 ほど都市調査 結果の考察過程に織り込もうとする誘惑を、 は近江の調 理 0 レベ 分析したり一 都市一 査 ル たからである。 に限らず、 は困難になるというジレンマは、 から統計学に深く依拠するようになった調査方法論には、 般レベ 般化するための道具立てや戦略的構想を意識的に用意することもなかった。 ルに議論を展開させようとする欲求、 少なからぬ都市社会調査にも当てはまるように思われる。 そのため分析の論理の中に空白地帯が生じたものと考えてよいだろう。 V まさにこのような かに適切に処理するか。 冒頭で引用した中筋の主張、 つまりその調査が 「母集団の桎梏」 この問題は、 母集団の外部を把握する技法は存在 「調査していないこと」 とも呼びうる状況をも指 個別の個性ある都市を母集団 つまり社会調査 社会調査技術 なぜなら基本的 こうした構図 が整備され の統計学的 を じ示 調 る

てい

るのであろう。

しての りは、 してい 査は、 である。 だろうか。 二に指摘したいことは なけ 位 人々のつながりそのものを直接調べることはできない。 る。 場 般的 のズレ い諸刃の剣という側面も持っていることに注意しなければならない。 奥井と近江の事例でいえば、 影 n かし、 人々のつながりを捉えるための ばならない。 にいって、人と人との空間的共存のあり方を何らかの角度から切り取ろうとすることをその根 を介して「人と人」との関係 が ありながらもその処理が一 量的な質問紙調査であろうと質的なインタビュ このような状況に際して、 「人々のつながりと場 比較的把握が容易であった「人と場所」 見容易であるからこそ、 を三角測量的 「場所」 所 という補助線は、 都市調査 との関係 に推測しようとするわけである。 調査の単位と関心の単位とのズ の場合は に か ー調査であろうと、 か かえって論理の空白が残りやすい わる問題である。 あく 「場所」 までも これも都市社会調査のひとつのジ の関係を大量に調査し、 という補助線 補 助 線で 調査単位 都市社会や あり、 V を引くことが か は が 何らか 都 個 地 た 市 域 人であ 基準点と ので 社 調 0) 方法 る限 幹と は 可 0) 0 調

指し示しているのであろう。

崎 のつながりを明らかにしようとすればするほど、 一の警鐘、つまり戦後の社会調査おける問題意識と調査方法の不整合という問題は、 ンマである。 オーセンティックな調査法に従う限り、 調査の論理は困難に直面することになる。第二節で引用した島 個人を単位として社会を調査することになるため、 まさにこのような状況をも 人々

査することで「大都市郊外」 (狭義の)社会調査ではない、 |調査問題を生み出すという副作用をもたらした上に、この問題構造を複雑な方法論の体系の中に絡めとり、 奥井も近江も「人と人との関係」を知ろうという社会の研究としては至極当然なことを問題としただけに過ぎ しかし都市社会調査の技術としては、 をも知ろうとした。 別の次元に侵出してしまうものであった。 それはクリティカルな弱点でもあった。さらに近江は しかしそれは発展した調査方法論からいえば厳密 調査技術の精緻化が、 対処困難な 鎌倉」 な意味 類

ドラの箱 ぜひとも開けなければならない扉であった。 もたげてい 近江やその同時代の並走者たちは、社会調査にとっての新たな扉を開けた。 0) たのである。 扉でもあった。 今日社会調査のジレンマとして提起されているような問題状況が、 しかしその扉とは、 社会の研究という営為にとっては、 それ は社会調 查 早くもここに 0 発展 の ために わ は 易に見えにくいものとしていったのである。

望」を改めて探し出すことが、 針を定めていくのならば)、 し幸 に調査技術上の制約に抵触しない研究を進めていけるのならば ンドラの箱から飛び出したはずの このような発見の論理に内在するジレンマ状況に気づかずに済むかもし 今日我々に課せられている課題なのではないだろうか。 「災い」の数々を見極めつつ、箱の底に残されているという「希 (あるい はその要請に沿うように研 れない。 か

- のママとした(以下同)。 置は注4も参照のこと。 ている行動と関係は、 していないのである」(Lundberg, 1942 = 1952: 12)と述べている。ランドバーグの著作の社会調査史上における位 こうした「発見」 幾千万年も存在していたかも知れないが、科学的法則そのものは、 の位置付けについて、 なお、 引用にあたっては、 「科学的」な量的調査の必要性を説いたランドバーグは、 旧字体漢字を新字体漢字に置き換え、旧仮名遣いや傍点等は原文 それ が述べられる迄は存在 「法則 が
- 化を反省的に捉える調査方法論議が現れている。 極に位置するように見える質的調査の多くも、 データ収集とデータ分析とを明確に分化させていくという点では、 同じ論理を共有してきたといえる。 標準化された量的調査とは一見したところ対 ただし近年になって、こうした分
- 3 磯村英一の『人間にとって都市とは何か』という三つの「古典」である。 ここで中筋が議論の俎上に乗せているのは、 奥井復太郎の『現代大都市論』、 鈴木栄太郎の『都市社会学原理』、
- $\widehat{4}$ 科書として永く読み継がれることになる福武直『社会調査』の初版が刊行されたのが一九五八年と、 berg, 1942) が翻訳出版されたのが一九五二年、 いなかった統計的方法と測定的方法による社会調査のマニュアルとして広く迎えられたランドバーグの著作(Lund-○年代のことであった。 とくに大きな影響力をもった戦後の社会調査のテキストを例にとると、それまで日本では類書があまり存在して そして、アメリカ型方法論を摂取・消化し標準的な社会調査法の教 いずれも一九五
- 5 取り上げる近江哲男の五人である。なお、このうち矢崎の仕事についてはすでに検討したことがある ここで中筋が と)、②こうした学史観の定着の結果として、「第一世代」は言うまでもなく、 戦略であったこと(つまり「第一世代」という呼称はアウト・オブ・デートを印象づけるためのラベルでもあったこ の指摘するように、①世代論は「第二世代」自身がそれ以前の研究に比して自らの研究の優位性を際立たせるための の中間に位置する研究者たちも、学史上正当な評価を与えられにくくなったこと、 ただしこのような世代論による学史観には、 「第一・五世代」として名を挙げているのは、矢崎武夫、 いくつかの問題が含まれている。 中野卓、 年齢的に 島崎稔、 この二点に注意せねばならない。 中筋 第一世 (二〇〇二、七九一八一 安田三郎、 と「第二世代 そして本論文で

Щ

- $\widehat{6}$ のちに奥井(一九五四)は地域調査の理想像としてミドルタウン調査を挙げるようになる。
- $\widehat{7}$ 調査のそれと殆ど大した相違を示してゐないから、調査成績の上から見ても、国勢調査による方がより効果的であり、 だし、そもそもサンプリング法は「社会調査の領域では、一九四〇年代に入って漸く用いられるようになった」(安 若し必要とあらば、若干の付帯調査項目を添付すればいゝのである」(奥井、一九三九a、三頁)と述べている。 用せらるゝ事が許されるならば、 一九五四、一八七頁)ものである。 奥井は鎌倉町調査のような「戸口調査」 別に改めて行ふ必要なきものである。蓋し、後で示す様に今次の調査項目は について、「元来、 かゝる手続は国勢調査の結果が充分地域、 多的局、 的、
- 8 を根拠として、鎌倉が東京化しているという仮説が支持されると述べられている。 (鎌倉市議会史編纂委員会、一九六九、一○二頁)。ここでは、納税額とその変容を分析した結果、 この予備調査の結果は論文にはまとめられていないが、東京日日新聞(神奈川版)に記事として発表され 高額納税者の増加 てい 3
- 9 無視する理ではないが、之れは別の機会に譲る」(奥井、一九三九a、三頁)と述べている。 「本調査執行についての細目は省略する。勿論、調査方法及び手続が調査成績及び結果に多大の関係 が あるのを
- $\widehat{10}$ 本資料の所在については、 郷土史家の八木直生氏よりご教唆をいただいた。
- 対する反感に就いて見ても、 云ふと、調査者に加へられた批評や悪罵に就いて見ても、又調査票配布に援助を仰いだ土地の青年団其の他の団体 があつた。既に述べた様に世帯数にして約二○%弱を逸してゐることになつてゐるが、 後になって調査拒否について次のような興味深いことを述べている。「鎌倉町の調査に際しても若干の回答拒否 此の種の『反対者』の性質は凡そ想像がつくと云へる。」(奥井、 此の逸した部分が、 一九四〇、 四六三一 何者か 74
- 以下本項でとりあげる調査結果等はすべて奥井(一九三九a・一九三九b)より引用したものである。
- みである(鎌倉市議会史編纂委員会、一九六九、一〇二頁)。 奥井調査関係の資料は残されていない。唯一の例外として『議会史』が東京日日新聞の記事に簡単に言及しているの これまでの筆者の調査の限りでは、鎌倉市の公的な機関 (市立図書館・市政情報室・近代史資料収集室など)に
- 奥井四良氏よりご教示を得た。二〇〇〇年七月一五日の筆者によるインタビューより。

- 市政調査会からの報告書のほかに、近江の名義で発表された論文もある(近江、 一九五六・一九五七)。
- を得た。二〇〇二年一〇月一二日および一九日の筆者によるインタビューより。 市政調査会の状況については、 近江の経歴については、 早稲田大学 一九五二年より同会に在職されていた齋藤昌男氏 『社会学年誌』二五号に掲載された年譜と、 ほかに市政調査会(一九六二)も参 外木(一九八四)を参照のこと。 (立正大学名誉教授) のご教示
- さらに調査報告書の執筆に際しては「一人の筆によって全篇の補正と文章の統一を試みた」(近江、 九五
- 二頁)というが、その「一人」とは近江その人であったのではないかと推測される。 学校を通じて配票できた「就学児童のいる世帯」に対して、 近隣の 「同様の職業の家」を適宜選んで調査票を

送してもらうという方式で配票している。

- を面接した「マス・コミュニケーション過程と労働者の価値態度調査」では一五万円 クフェラー は文部省科学研究費の四〇万円(日本社会学会調査委員会、 蛇足ながら同時 ということである。 財団から支給された四六八万円(同書、三頁)、一九五四年に東京大学新聞研究所が川崎 期の他の調査の調査費と比較してみると、一九五二年に実施されたSSM六大都市調査 一九五八、二頁)、一九五五年のSSM (福武、 一九五八、八三-四 市 全国調査は で約七〇〇名
- $\widehat{21}$ その他外部の専門家が適宜協力している。 この二人のほかに、内山和 近江は都市の社会構成調査の方法を論じた機会に、「市民をその平均値において見るのではなく、 (市政調査会)、 久山満夫 (観光論・ 武蔵大学)、 武基雄 (都市計画・ これを階層 稲田大学)、
- して観察することの重要性」を主張し、あわせて「SSM調査のように階層の移動の状況も調べることが望ましい」 (近江、一九五五b、 四五頁)と述べている。
- 23 ただしそのうち準世帯五〇と外国人世帯二五二を除外してい
- 作的に定義している〕 「鎌倉といえばブルジョアを予想するが、 の中には戦前からの居住者はきわめて少ない〔七%〕のである」(七〇頁) という。 現在の鎌倉のブルジョア 〔調査上では世帯主が経営者である者と操

さらに鎌倉的伝統を担うと思われる上流階級であっても、必ずしも永く鎌倉に定着しているわけではない

こうした住民の入れ替わりの強調はいささか過剰気味であると思われる。 .ば、約六-七割程度もの世帯が戦後の近江調査の時点まで居住し続けている計算になるからである。 奥井調査前後の戦前の時点を基準として見

- ○円)と比較している。 れた東京(二五〇二九円)と横浜(二二八六一円)の一世帯平均消費支出を、鎌倉市調査での平均家計費(二三六三 根拠は自らの鎌倉市調査と同年同月に実施された総理府統計局の消費者価格調査のデータであり、そこで算出
- しろ貧富の差が大きいことを示しているともとれる。 は階級間隔が斉一でないという作図上の欠陥があり、 いており、階層間の断絶は認められない」(一○頁)と分析されているが、その「別掲の図表」であるヒストグラム 一例を挙げれば、「家計費が下層から中流、上流に移行する状況も、別掲の図表が示すように堅実なカーブを描 正確に作図した場合「堅実なカーブ」とは言い切れないし、
- 27 ただし多くの項目では一五歳以上の「生産年齢人口」のみに限定して集計している。 調査票は世帯単位であったが、学歴などの個人項目は、世帯主以外の世帯員をも含めた個人単位で算出している。
- れにせよ、彼の根源にある思想や視座については、機会を改めて検証する必要があろう。 ークな視点があった。また、共同体なしには人は生きていくことができないという旨の発言もしている。 たとえば近江の町内会研究には、伝統的共同体を一概には否定しないという、当時の学界においては非常にユニ 今後の課題としたい。 しかしいず
- にはデータ上の裏づけが得られていないという憾みはある。 とはいえ厳密にいえば、隣接地域など鎌倉以外のデータは利用できていないので、鎌倉を「飛び地」とする議論

文献

福武直、一九五八、『社会調査』、岩波書店。

九三七、「鎌倉町だより」『鎌倉』三巻二号、 一九五五、「昭和二九年における都市研究の動向― 、八四頁。 社会学の立場から」 『都市問題』 四六卷一号、一一七頁。

川合隆男、 鎌倉市議会史編纂委員会、一九六九、『鎌倉議会史 記述編』、鎌倉市議会。 一九八九、「近代日本社会調査史研究序説」、 同編 『近代日本社会調査史(Ⅰ)』慶應通信、三-三二頁。

川合隆男、一九九六、「日本の社会学史と社会調査」、有末賢ほか編『社会学入門』弘文堂、二四三-六五頁'

倉沢進、一九九二、「都市社会学のフロンティア」、倉沢ほか編『都市社会学のフロンティア』日本評論社、 倉沢進、 一九五九、「都市化と都会人の社会的性格」『社会学評論』九巻四号、三三-五二頁。

Lundberg, G. A., 1942, Social Research: A Study in Methods of Gathering Data, 2nd edn., Longmans, Greed v 頁。

& Co. (福武直・安田三郎訳、一九五二、『社会調査』、東京大学出版会。)

松尾浩一郎、一九九九、「社会的実験室としての東京――奥井復太郎の都市研究とその時代」、 『都市論と生活論の祖型――奥井復太郎研究』慶應義塾大学出版会、六三-九一頁。 川合隆男 藤 田 弘夫編

松尾浩一郎、二〇〇一、「奥井復太郎の鎌倉調査・再訪――大都市郊外生活と郊外研究の源流」『三田社会学』六号、八

松尾浩一郎・柴田彩千子、二〇〇一、「統合機関説と戦後日本の都市社会学の展開」 〇頁。 『関東都市学会年報』三号、 九一二

六一九頁。

中筋直哉、一九九八、「都市社会調査法――一つの社会学入門」、田中宏編『社会学の視線 一一二九頁。 探究の諸相』 八千代出版

中筋直哉、二〇〇二、「日本の都市社会学――都市社会学の第一世代」、菊池美代志・江上渉編『二一世紀の都 学』学文社、七八一八九頁。 市社

日本社会学会調査委員会、一九五八、『日本社会の階層的構造』有斐閣

奥田道大、一九五九、「都市化と地域集団の問題-八一一九二頁。 東京都一近郊都市における事例を通じて」『社会学評論』九巻三号:

奥井復太郎、 奥田道大、一 一九三五、「大都市研究の基本調査に就て」『都市問題』二〇巻一号、一-一一頁。 九八七、「戦後日本の都市社会学と地域社会」『社会学評論』三八巻二号、五三-七一 頁

奥井復太郎、 奥井復太郎、 九三六b、「本塾に対する塾生の希望」『三田新聞』三五一号。 九三六a、「地域的社会調査に関する若干考察」『三田学会雑誌』三〇巻六号、三七-六八頁。

九三八a、「都市郊外論序説」『三田学会雑誌』三二巻五号、三五-六八頁。

奥井復太郎、 奥井復太郎、 九三九a、 九三八b、「塾生のジャーナリズム調査―― 「鎌倉町の現代相」『三田学会雑誌』三三巻一号、一-三八頁。 -調査に対する二つの批判」『三田新聞』

奥井復太郎、 九三九b、 「大都市の発展に伴ふ近郊社会の変質――鎌倉町調査の第二報告」『三田学会雑誌』三三巻一

奥井復太郎、 九三九c、「鎌倉の今昔」『歴史と生活』二巻二号、六一-三頁。

一八五号。

奥井復太郎、 九四〇、『現代大都市論』有斐閣。

近江哲男、 奥井復太郎、 九五四、「東京市政調査会『豊中市総合調査報告書』の概要」『都市問題』四五巻六号、四九-五八頁。 一九五四、「都市研究の基本的課題-――日本都市学会大会によせて」『都市問題』四五巻五号、三-八頁。

近江哲男、 九五五a、「都市の範域」『フィロソフィア』二八号、一二七-五六頁。

近江哲男、 近江哲男、 九五五b、「都市総合調査の方法について」『都市問題研究』七巻八号、三五-四七頁。 九五六、「大都市圏周辺地域における最近の人口移動」『都市問題』四七巻九号、二九-三七頁。

近江哲男、 一九五八、「都市における社会成層」『都市問題』四九巻一号、一〇-七頁。

一九五七、「大都市郊外住宅地の生活と地域社会の問題」『都市問題』四八巻五号、三〇-六頁。

近江哲男、

大須真治、 一九九〇、「戦後社会調査の流れ」、江口英一編『日本社会調査の水脈――そのパイオニアたちを求めて』

法

律文化社、三五五-八二頁。

島崎稔、一九七九、「戦後社会調査の動向と問題意識」、島崎『社会科学としての社会調査』東京大学出版会、 四頁。(初出は一九五六、「社会調査の動向とその問題意識」、林恵海教授還曆記念論文集『日本社会学の課題』 <u>—</u> 五

鈴木栄太郎、一九五四、「都市社会調査方法論序説」『都市問題』四五巻五号、九-一五頁。

鈴木広、 一九五九、「都市研究における中範囲理論の試み― -都市共同体論覚書」『社会学評論』 九巻三号、二六-四三

鈴木広、一九八五、 「概説 日本の社会学 都市」、 鈴木ほか編『リーディングス日本の社会学七 都市』東京大学出版会、

82

戸田貞三、一九三三、『社会調査』時潮社。高橋勇悦、一九九三、『都市社会論の展開』学文社。

東京市政調査会、一九六二、『東京市政調査会四〇年史』。東京市政調査会、一九五七、『鎌倉市――都市構成と財政』。東京市政調査会、一九五三、『豊中市総合調査報告書』。

浦野正樹、一九八七、「住民の地域移動と住みかえ――大都市圏流動層の形成と流動メカニズム」、小林茂ほか編 外木典夫、一九八四、「近江哲男教授を追悼す」『社会学年誌』二五号、二三一-九頁。 化と居住環境の変容』早稲田大学出版部、二〇七-四四頁。

安田三郎、

一九五四、「社会調査に応用される統計学」、福武直編 『社会調査の方法』有斐閣、一八七-二一六頁。